

## フレンドシップ事業についての学生と教育関係者による評価

諫山邦子<sup>1</sup>・奥山洸<sup>2</sup>

<sup>1</sup>北海道教育大学釧路校学校教育講座幼児教育 <sup>2</sup>北海道教育大学釧路校学校教育講座教育心理学

### Evaluation of the Friendship Program in 1998

Kuniko ISAYAMA<sup>1</sup> and Kiyoshi OKUYAMA<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Department of Preschool Education, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

<sup>2</sup>Department of Educational Psychology, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

#### Summary

The purpose of this study was to assess the 1998 Friendship Program of Hokkaido University of Education, held in Kushiro, Japan. The program was evaluated utilizing the following three factors: operational and administrative view points, effects of each camping activity, and the self-esteem of each group leaders in the camp.

The following results were obtained.

- 1) Natural environment of the area and its utilization were held to high standards.
- 2) At each activity, a dragnet, a cookout, and Nature Games were effective.
- 3) Leaders' concerns beforehand and afterwards was to promote child's better understanding.

#### はじめに

教員養成大学・学部における教員を志す学生の教員としての実践力養成に資するため、文部省の平成9年度政府予算において、教員養成学部フレンドシップ事業等促進経費が予算化された。それを受けて、北海道教育大学釧路校では、平成10年度フレンドシップ事業に初年度としての取り組みが行われた。本研究は、1) 指導にあたったスタッフ(以下、教員とする)・大学生による同事業全体と個別プログラムについての評価、2) 大学生の自己評価、の2つについて、それらを分析・検討することにより、本事業の評価、ならびに今後のフレンドシップ事業の展開に資することを目的とする。

#### 方法

##### フレンドシップ事業のプログラム

6月と7月の2回、釧路教育局、釧路市教育委員会、厚岸町教育委員会、利用施設、厚岸小学校、附属小学校、大学からの担当者14名を中心に企画運営協議会を行い、さらに、受講学生全体の事前準備会が5回おこなわれた。厚岸小学校と附属小学校の4~6年生を対象としたメインの事業では、「こどもとふれあう郷土の自然と歴史」をテ

ーマに、ウォークラリー、野鳥観察、ネイチャーゲーム、地引き網、野外炊飯、キャンプファイヤー、サンドアートと写真たてづくりの主要な7つの活動が、7月28日~30日の2泊3日の日程で、厚岸少年自然の家とその周辺において行われた(表-1)。10月には、事後の報告と反省会を兼ねたシンポジウムが行われ、一連のフレンドシップ事業が終了した。

##### 調査対象

事業の評価は、教員13名、大学生16名、計29名について、さらに、大学生の自己評価は、16名を分析の対象とした(表-2)。

##### 検査および手続き

事業評定票は、アメリカ・キャンプ協会のキャンプ・スタンダード<sup>1)</sup>を参考に作成した。

概括した事業評価は、3領域29項目から構成されており、さらに、個別プログラムの評価をみるために14項目を置いた。これらは、3点を平均とする5点満点の5段階評価とした。加えて、宿泊日数の適否と事業の時期、および参加者の対象・募集方法等についての意見も求めた。調査票の記入は、2泊3日の事業後に行われた。班指導者の自己評価は、井村の調査<sup>2)</sup>を参考に作成した。8

表-1. 日程

&lt; 1 日 目 &gt; 7 月 2 8 日 (火)

時間	活動名	活動内容	場所
7:50 8:00	教育大前集合 出 発	大学前集合・出発	教育大
9:30	厚岸小学校到着	厚岸小の子どもと交流	厚岸小
10:00	開講式 オリエンテーション	挨拶・諸注意	厚岸小体育館
11:00	交 流 昼 食	自己紹介・ゲーム 昼食	厚岸小体育室
12:00 :15 15:30	「街を探索しよう」 スタート(厚岸小) ゴール(厚岸小)	ウォークラリー (諸注意、説明) A、B班が最初にスタート 15分後、C、D班スタート	厚岸町
15:40	ネイバルへ移動	車でピストン輸送	
16:00	入 浴 自由時間	雨に濡れたので、入浴 夕食まで自由交流	ネイバル厚岸
17:30	夕 食	セルフサービス	食 堂
18:00	入 浴 自由時間	入浴、自由交流	ネイバル厚岸
19:00	話し合い	ウォークラリー表彰式 翌日の諸注意 探険の旅、野外炊飯について	おおくま
20:00	自由時間	子どもは自由交流 学生らはミーティング	おおくま
22:00	就 寝		宿泊室

&lt; 2 日 目 &gt; 7 月 2 9 日 (水)

時間	活動名	活動内容	場所
5:30	起 床	洗面・寝具、荷物の整理 部屋の清掃・健康チェック	宿泊室
6:00	野鳥観察	水鳥観察官渡谷氏の話 ・A B、C D班毎に行動	ネイバル厚岸 ⇒愛宕岬
7:30	朝のつどい	ラジオ体操・連絡 ★担当～B班	体育館
8:00	朝 食	班毎に食事	食 堂
8:30	「探険の旅」	ネイチャーゲーム (りす、うさぎ、あざらし班に 分かれて活動)	ネイバル厚岸 周辺部
12:00	昼 食	班毎に食事	食 堂
12:30	門静に移動	バスで移動(1号車A、C 2号車B、D)	ネイバル厚岸 ⇒門静
13:00	地引き網体験	漁師さんの話 ・地引き網体験	門 静
15:00	ネイバルに移動	バスで移動	門静⇒ ネイバル厚岸
15:30	野外炊飯	食材、用具の確認 ・火起こし・調理	野外炊飯場
17:30	夕 食	できた班から食事 ・後片付け	野外炊飯場
19:00	キャンプファイヤー 報告会	キャンプファイヤー ・子どもの2日間の感想 ・フォークダンス	運動場
20:30	入浴・自由時間	入浴、自由交流	
22:00	就 寝	学生らはミーティング	宿泊室

&lt; 3 日 目 &gt; 7 月 3 0 日 (木)

時間	活動名	活動内容	場所
6:00	起 床	洗面・荷物、寝具の整理 ・部屋の清掃	宿泊室
7:00	ゴミ拾い	野外炊飯場近辺のゴミ拾い	野外炊飯場近辺
7:30	朝のつどい	ラジオ体操・連絡	体育館
8:00	朝 食	班毎に食事	食 堂
8:30	点 検	宿泊室の点検 ・8:50迄荷物を持って、 玄関前集合 ・8:55、バスに搭乗	ネイバル厚岸
9:10	思い出作り	サンドアート ・写真立て作り ・写真撮影、後片付け ・1号車A D、2号車B C	養楽恋海岸
12:30	昼 食	班毎に食事	食 堂
13:00	開講式	挨拶など	体育館
13:30	厚岸小とお別れ	1号車A D、2号車B C	厚岸小
15:00	到着・解散	教育大前到着、解散	教育大

表-2. 調査対象者

	大学生	教員	合計
男	5	12	17
女	11	1	12
合計	16	13	29

項目についてそれぞれ、重視して準備したり努力したことと、今後強化する努力をしたい能力について、3.5点を平均とする6点満点の6段階評価とした。井村によれば、「7つの項目は、5か国の野外活動指導者養成について比

較調査をした研究において、望ましい野外活動指導者の諸特性のひとつとして挙げられている」としている。その7項目に「児童の理解」という項目を加えて、8項目について2泊3日の事業後に記入を求めた。

表-3.1. スタッフによる事業の評価 (1)  
-活動地域・施設に関する評価-

注: 5点満点で評定した結果である。

項目	学生 (N=14)		教員 (N=11)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1. 活動区域内の危険区域について参加者及びスタッフに周知徹底されていきましたか	3.14	(0.91)	3.36	(0.64)
2. 予測可能な事故等に対する危機管理はよかったですか	2.86	(0.91)	3.45	(0.66)
3. 活動を展開した場所は豊かな自然資源が確保されていたと思いますか	4.79	(0.41)	4.55	(0.50)
4. 活動を展開した場所の自然環境を活用していたと思いますか	4.93	(0.26)	4.55	(0.50)
5. 活動場所の飲料水などの水質検査状況はよかったですか	3.14	(0.83)	3.82	(0.83)
6. 宿泊施設の周囲の環境はよかったですか	4.64	(0.48)	4.73	(0.45)
7. 保健・衛生の手続き(トイレ・洗面所・炊事場など)はよかったですか	4.43	(0.82)	4.64	(0.48)

表-3.2. 多重比較  
-活動地域・施設に関する評価- (学生)

項目	平均	項目番号						
		2	1	5	7	6	3	4
2. 危機管理	2.86							
1. 危険区域の周知	3.14							
5. 水質検査状況	3.14							
7. 保健・衛生	4.43	*	*	*				
6. 周囲の環境	4.64	*	*	*				
3. 豊かな自然資源	4.79	*	*	*				
4. 自然環境の活用	4.93	*	*	*	*			

\*:  $p < .05$

表-3.3. 多重比較  
-活動地域・施設に関する評価- (教員)

項目	平均	項目番号						
		1	2	5	3	4	7	6
1. 危険区域の周知	3.36							
2. 危機管理	3.45							
5. 水質検査状況	3.82							
3. 豊かな自然資源	4.55	*	*	*				
4. 自然環境の活用	4.55	*	*	*				
7. 保健・衛生	4.64	*	*	*				
6. 周囲の環境	4.73	*	*	*				

\*:  $p < .05$

### 結果と考察

大学生と教員による事業の評価をみるための29項目は、『活動地域・施設』7項目(表-3.1.)、『管理・運営』11項目(表-4.1.)、『プログラム』11項目(表-5.1.)、の各領域毎に、群(大学生・教員)×項目(7項目/11項目/11項目)の2要因分散分析を行った。個別プログラムの評価をみるための14項目(表-6.1.)は、『プログラムの効果』7項目、『事前準備』7項目に分け、同様に2要因分

散分析を行った。また、対応する項目間の相関係数を算出した(表-7.)。自己評価の16項目(表-8.1.)は、『これまでの準備や努力』8項目と、『今後強化したい能力』8項目に分け、1要因分散分析を行った。ここでも対応する項目間の相関係数を算出した(表-9.)。分散分析の多重比較には、最少有意差法を用いた。

#### 1) 事業全体の評価

**活動地域・施設** 交互作用が有意であった( $F(6,138)=2.78, p < .05$ )。単純主効果を見ると、項目2「危機管理」で教員の平均が傾向として高かった( $F(1,23)=3.08, .05 < p < .10$ )。項目4「自然環境の活用」で学生の平均が有意に高かった( $F(1,23)=5.69, p < .05$ )。項目5「水質検査状況」で教員の平均が傾向として高かった( $F(1,23)=3.72, .05 < p < .10$ )。群毎の多重比較の結果を表-3.2.、および表-3.3.に示す( $MSe=0.34, p < .05$ )。学生と教員では類似した結果となっており、いずれも評価の低い項目1、2、5と、評価の高い項目3、4、6、7に分かれている。全体的に評価が高かったものは、活動が展開された場所の自然環境やその活用に関する項目であった。本事業では厚岸町の地域素材が充分活用されていたことが示されたものである。これらは、標準偏差も比較的小さく、一定した評価でもあった。また、野外教育活動を行っていく上で最も重要な基本事項としての危機管理等に関しては、平均得点ではあったが、さらに、周知への詳細な配慮が望まれるところである。3領域のうち、全体として本領域の評価が一番高かった。

**管理・運営** 交互作用が有意であった( $F(10,230)=5.94, p < .01$ )。単純主効果を見ると、項目4「保護者とのコミュニケーション」で教員の平均が有意に高かった( $F(1,23)=16.94, p < .01$ )。これは、学生側に保護者とのつながりが見えにくい運営体制であったことが影響

表-4.1. スタッフによる事業の評価 (2)

-管理・運営に関する評価-

注: 5 点満点で評定した結果である。

項 目	学生 (N=14)		教員 (N=11)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1. フレンドシップ事業の目標は明確であったと思いますか	4.14	(0.83)	4.00	(0.74)
2. 目標はスタッフに周知徹底されていたと思いますか	3.64	(0.81)	3.73	(0.62)
3. 自然保護のための対策と指導を行ったと思いますか	3.43	(0.98)	3.27	(0.86)
4. 保護者とのコミュニケーション (説明会、報告書など) を確保していたと思いますか	1.93	(0.80)	3.27	(0.75)
5. スタッフの職務分担と各プログラムでの役割は明確であったと思いますか	4.36	(0.81)	3.00	(0.74)
6. スタッフの分担業務は適切に行われていたと思いますか	3.93	(0.96)	3.36	(0.77)
7. 毎日スタッフ会議を実施してスタッフ間の交流を図っていたと思いますか	4.43	(0.90)	3.64	(0.77)
8. 事業期間中、スタッフの休養・自由時間は適切だったと思いますか	2.21	(1.15)	3.09	(0.90)
9. フレンドシップ事業の組織だった評価を行っていたと思いますか	3.86	(0.74)	3.55	(0.50)
10. 食料計画と食料担当者への衛生指導はなされていたと思いますか	3.07	(1.16)	3.55	(0.50)
11. 用具の手入れと保管、及びその指導はよくなされていたと思いますか	3.36	(0.81)	3.55	(0.66)

表-4.2. 多重比較

-管理・運営に関する評価- (学生)

項目	平均	項目番号																		
		4	8	10	11	3	2	9	6	1	5	7								
4. 保護者とのコミュニケーション	1.93																			
8. スタッフの休養	2.21																			
10. 食料計画と衛生指導	3.07	*	*																	
11. 用具の手入れ	3.36	*	*																	
3. 自然保護の対策	3.43	*	*																	
2. 事業目標の周知	3.64	*	*																	
9. 事業の組織的評価	3.86	*	*	*	*															
6. 分担業務の実行	3.93	*	*	*	*															
1. 事業目標の明確化	4.14	*	*	*	*	*	*													
5. 職務分担の明確化	4.36	*	*	*	*	*	*	*	*											
7. スタッフ間の交流	4.43	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*									

\*: p&lt;0.05

表-4.3. 多重比較

-管理・運営に関する評価- (教員)

項目	平均	項目番号																		
		5	8	3	4	6	9	10	11	7	2	1								
5. 職務分担の明確化	3.00																			
8. スタッフの休養	3.09																			
3. 自然保護の対策	3.27																			
4. 保護者とのコミュニケーション	3.27																			
6. 分担業務の実行	3.36																			
9. 事業の組織的評価	3.55																			
10. 食料計画と衛生指導	3.55																			
11. 用具の手入れ	3.55																			
7. スタッフ間の交流	3.64																			
2. 事業目標の周知	3.73	*																		
1. 事業目標の明確化	4.00	*	*	*	*	*	*													

\*: p&lt;0.05

していると考えられる。項目 5「職務分担の明確化」で学生の平均が有意に高かった ( $F(1,23)=17.15, p<.01$ )。学

生の役割分担は、明確であったが、教員側の 14 名の職務分担が当初より不明瞭であったことが指摘されており、今後の課題であろう。項目 7「スタッフ間の交流」で学生の平均が有意に高かった ( $F(1,23)=4.95, p<.05$ )。項目 8「スタッフの休養」で教員の平均が有意に高かった ( $F(1,23)=3.99, p<.05$ )。この差は、教員側は、経験的に、短期間の宿泊を伴う野外教育活動において、運営側の休養時間の確保が、困難になりがちな現実を認識していることが背景にあると思われる。群毎の多重比較の結果を表-4.2.、および表-4.3.に示す ( $MSe=0.60, p<.05$ )。学生では、評価の高い項目 7、5、1、それに続く項目 6、9、評価の低い項目 2、3、11、10、著しく評価の低い項目 8、4 と、評価の程度が細かく分化している。教員では、評価の高い項目 1、ないしそれに準ずる項目 2、評価の低い項目 5、ないしそれに準ずる項目 8、3、4、およびそれら以外に分かれるのみである。管理・運営の領域に対して、学生と教員の評価に違いが見られたと言える。全体的に評価の高かったものは、項目 1「事業目標の明確化」であった。事業を行っていく上で重要な基本事項として目標や運営方針が充分確保されていたといえる。低かったものは、項目 8「スタッフの休養」であった。今後、事業が継続される上では、課題となる。

プログラム 交互作用が傾向として有意であった ( $F(10,270)=1.86, .05<p<.10$ )。単純主効果を見ると、項目 7「自然環境への理解」で学生の平均が有意に高かった ( $F(1,27)=4.99, p<.05$ )。項目 8「冒険欲求への対応」で学生の平均が有意に高かった ( $F(1,27)=5.61, p<.05$ )。これら

表-5.1. スタッフによる事業の評価 (3)

-プログラムに関する評価-

注: 5点満点で評定した結果である。

項目	学生 (N=16)		教員 (N=13)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1. 天候の急変などに対応できる柔軟なプログラムだったと思いますか	3.50	(1.06)	3.92	(0.27)
2. 社会性を育てるような配慮を行っていたと思いますか	4.06	(0.90)	3.92	(0.47)
3. グループの協力や個人差について理解できる機会を設けていたと思いますか	3.81	(0.81)	4.00	(0.55)
4. 参加者の異なる知識・技術・経験に対応した内容だったと思いますか	4.06	(0.66)	3.77	(0.42)
5. プログラムは、個人活動、グループ活動、全体活動の配分を考慮していたと思いますか	3.69	(0.92)	3.92	(0.62)
6. 参加者の自主的活動の場を確保していたと思いますか	4.00	(0.94)	3.77	(0.58)
7. 自然環境について理解する機会を設けていたと思いますか	4.50	(0.61)	3.92	(0.73)
8. 参加者の冒険欲求を満たすことができましたと思いますか	4.19	(0.63)	3.69	(0.46)
9. 単に技術だけを教えるのではなく発展性を持たせるように理解させていたと思いますか	3.94	(0.75)	3.62	(0.49)
10. 食事メニューは変化に富み、適切な内容だったと思いますか	3.94	(0.97)	3.31	(0.82)
11. フレンドシップ事業は期待通り満足した内容だったと思いますか	4.38	(0.70)	4.23	(0.58)

表-5.2. 多重比較

-プログラムに関する評価- (学生)

項目	平均	項目番号												
		1	5	3	9	10	6	2	4	8	11	7		
1. 天候急変への対応	3.50													
5. 活動形態の配分	3.69													
3. グループの協力や個人差への理解	3.81													
9. 発展性についての理解	3.94													
10. 食事メニュー	3.94													
6. 参加者の自主的活動	4.00													
2. 社会性への配慮	4.06 *													
4. 個人差への対応	4.06 *													
8. 冒険欲求への対応	4.19 *													
11. 事業全体の満足度	4.38 * * *													
7. 自然環境への理解	4.50 * * * * *													

\* : p<.05

表-5.3. 多重比較

-管理・運営に関する評価- (教員)

項目	平均	項目番号												
		10	9	8	4	6	1	2	5	7	3	11		
10. 食事メニュー	3.31													
9. 発展性についての理解	3.62													
8. 冒険欲求への対応	3.69													
4. 個人差への対応	3.77													
6. 参加者の自主的活動	3.77													
1. 天候急変への対応	3.92 *													
2. 社会性への配慮	3.92 *													
5. 活動形態の配分	3.92 *													
7. 自然環境への理解	3.92 *													
3. グループの協力や個人差への理解	4.00 *													
11. 事業全体の満足度	4.23 * *													

\* : p<.05

の差は、活動プログラム全般に実質的な参加者として関わり、直接的な自然体験を行った学生と、活動の周辺か

ら観察者として関わっていた教員との、プログラムへの関わり方の違いから出ていたものと推察される。項目 10「食事メニュー」で学生の平均が傾向として高かった (F(1,27)=3.24, 05<p<.10)。群毎の多重比較の結果を表-5.2、および表-5.3. に示す (MSe=0.45, p<.05)。学生では、評価の高い項目 7、11、それに続く項目 8、4、2、評価の低い項目 10、9、3、5、評価のさらに低い項目 1、およびそれら以外に分かれている。教員では、評価の高い項目 11、それに準ずる項目 3、7、5、2、1、評価の低い項目 10、およびそれら以外に分かれている。プログラムの領域でも学生の評価は細かく分化していると思われ、教員との評価の違いがみられる。全体として評価の高かったものは、項目 11「フレンドシップ事業の満足度」の項目であった。大学生や児童を対象としたフレンドシップ事業の目的が充分達成されていたことを示すものである。

## 2) 個別プログラムの評価

**個別プログラムの効果** 項目の主効果のみが有意であった。(F(6,144)=5.55, p<.01)。多重比較の結果を表-6.2. に示す。(MSe=0.27, p<.05)。評価の高い項目 4「地引き網」、それに準ずる項目 5「野外炊飯」、3「ネイチャーゲーム」、それらに続く項目 1「ウォークラリー」、7「サンドアート」、評価の低い項目 2「野鳥観察」、6「キャンプファイヤー」となっている。

**個別プログラムの準備** 項目の主効果のみが有意であった。(F(6,132)=2.88, p<.05)。多重比較の結果を表-6.3. に示す。(MSe=0.72, p<.05)。評価の高い項目 1「ウォークラリー」、それに準ずる項目 4「地引き網」3「ネイチャーゲーム」、

表-6.1. 個別プログラムの評価

注: 5点満点で評定した結果である。

項目	平均	標準偏差	人数
1. ウォークラリー : 効果のあるよいプログラムだったと思いますか 事前準備は充分だったと思いますか	4.32	(0.60)	28
2. 早朝野鳥観察 : 効果のあるよいプログラムだったと思いますか 事前準備は充分だったと思いますか	3.93	(0.84)	28
3. ネイチャーゲーム : 効果のあるよいプログラムだったと思いますか 事前準備は充分だったと思いますか	4.50	(0.57)	26
4. 地引き網体験 : 効果のあるよいプログラムだったと思いますか 事前準備は充分だったと思いますか	3.89	(0.87)	27
5. 野外炊飯 : 効果のあるよいプログラムだったと思いますか 事前準備は充分だったと思いますか	4.61	(0.49)	28
6. キャンプファイヤー : 効果のあるよいプログラムだったと思いますか 事前準備は充分だったと思いますか	3.96	(0.98)	28
7. サンドアート : 効果のあるよいプログラムだったと思います 事前準備は充分だったと思いますか	4.59	(0.49)	27
	3.54	(0.68)	28
	4.14	(0.58)	28
	3.63	(0.76)	27
	4.32	(0.66)	28
	3.75	(0.98)	28

表-6.2. 多重比較

-個別プログラムの効果に関する評価-

項目	平均	項目番号						
		2	6	7	1	3	5	4
2. 早朝野鳥観察	3.93							
6. キャンプファイヤー	4.14							
7. サンドアート	4.32	*						
1. ウォークラリー	4.32	*						
3. ネイチャーゲーム	4.50	*	*					
5. 野外炊飯	4.59	*	*					
4. 地引き網体験	4.61	*	*	*				

\*: p&lt;.05

表-6.3. 多重比較

-個別プログラムの準備に関する評価-

項目	平均	項目番号						
		2	5	6	7	3	4	1
2. 早朝野鳥観察	3.30							
5. 野外炊飯	3.54							
6. キャンプファイヤー	3.63							
7. サンドアート	3.75							
3. ネイチャーゲーム	3.89	*						
4. 地引き網体験	3.96	*						
1. ウォークラリー	4.21	*	*	*	*			

\*: p&lt;.05

それらに続く項目、7「サンドアート」、評価の低い項目6「キャンプファイヤー」、5「野外炊飯」、評価のさらに低い項目2「野鳥観察」となっている。

2つの評価の関係 個別プログラムのそれぞれについて、効果の評価と準備の評価の相関係数を算出した(表-7.)。いずれについても有意な正の相関がみられた。つま

り、効果の評価と準備の評価が一致する傾向にある。

### 3) 事業日程の適否、時期および対象

2泊3日という実施日数について29名のスタッフ中、「このままでよい」とした者21名「期間を長くしたほうがよい」とした者6名、「期間を短くしたほうがよい」とした者0名であった。「このままでよい」とした者の中には、自由時間・余裕・ゆとりは欲しいとしたものが数名いた。実施時期については、7-8月(7月、7-8月、8月上旬、夏休み)が14名と多く、8-9月1名、年2回で冬季も開催希望のものが2名いた。募集対象・方法については、限定せず管内小学校に広く募集するという意見が15名と多く、活動地域の地元小学校2名、中学生までの対象を広げる2名であった。

### 4) 班指導者の自己評価

これまでの準備や努力についての自己評価 項目の主効果のみが有意であった(F(7,98)=4.41, p<.01)。多重比較の結果を表-8.2.に示す(MSe=0.27, p<.05)。評価の高い項目8「児童の理解」、1「組織・管理能力(スタッフ間の人間関係)」、およびそれに準ずる項目2「指導能力」とそれ以外に分かれている。これらから、事前に組織だって準備が進められ、指導に当たる上での準備には、児童の理解に焦点があてられていたことが伺える。

今後強化したい能力についての自己評価 項目の主効果のみが有意であった(F(7,105)=11.31, p<.01)。多重比較の結果を表-8.3.に示す(MSe=0.38, p<.05)。評価の高い項目8「児童の理解」、7「安全技術」、3「問題解決能力」、4「集

表-7. 個別プログラムの効果と評価と事前準備の評価の関係

項目	相関係数	検定結果
1.ウォークラリー	.49	**
2.早朝野鳥観察	.45	*
3.ネイチャーゲーム	.57	**
4.地引き網体験	.42	*
5.野外炊飯	.52	**
6.キャンプファイヤー	.52	**
7.サンドアート	.45	*

\*: p<.05    \*\*: p<.01

表-8.1. 自己評価

注: 6点満点で評定した結果である。

項目	平均	標準偏差
重視して準備したり努力したこと (N=15)		
1. 組織・管理能力 (スタッフ間の人間関係)	4.93	(0.93)
2. 指導能力	4.40	(1.02)
3. 問題解決能力	4.07	(0.85)
4. 集団運営能力	4.07	(0.68)
5. 環境理解	4.07	(1.00)
6. 野外活動技術	3.87	(1.15)
7. 安全技術	3.67	(1.30)
8. 児童の理解	5.00	(0.89)
今後強化する努力をしたい能力 (N=16)		
1. 組織・管理能力 (スタッフ間の人間関係)	4.75	(0.77)
2. 指導能力	5.56	(0.51)
3. 問題解決能力	5.69	(0.60)
4. 集団運営能力	5.63	(0.81)
5. 環境理解	4.56	(0.96)
6. 野外活動技術	4.81	(0.91)
7. 安全技術	5.75	(0.45)
8. 児童の理解	5.81	(0.40)

表-8.2. 多重比較

- これまでの準備や努力についての自己評価 -

項目	項目番号								
	平均	7	6	3	4	5	1	2	8
7. 安全技術	3.67								
6. 野外活動技術	3.87								
3. 問題解決能力	4.07								
4. 集団運営能力	4.07								
5. 環境理解	4.07								
2. 指導能力	4.40	*							
1. 組織・管理能力	4.93	*	*	*	*	*	*	*	*
8. 児童の理解	5.00	*	*	*	*	*	*	*	*

\*: p<.05

表-8.3. 多重比較

- 今後強化したい能力についての自己評価 -

項目	平均	項目番号							
		5	1	6	2	4	3	7	8
5. 環境理解	4.56								
1. 組織・管理能力	4.75								
6. 野外活動技術	4.81								
2. 指導能力	5.56	*	*	*					
4. 集団運営能力	5.63	*	*	*					
3. 問題解決能力	5.69	*	*	*					
7. 安全技術	5.75	*	*	*					
8. 児童の理解	5.81	*	*	*					

\*: p<.05

団運営能力」、2「指導能力」と、それに続く項目6「野外活動技術」、1「組織・管理能力」、5「環境理解」に分かれている。どの項目も得点が高く、その中でも安全を確保しつつ、集団として子ども達といかにかかわっていくかに、関心が高いと思われる。

2つの自己評価の関係 これまでの準備や努力についての自己評価と、今後強化したい能力についての自己評価の、対応する項目のそれぞれについて、相関係数を算出した(表-9.)。項目2「指導能力」、項目6「野外活動技術」の2項目で、有意な正の相関が見られた。つまり、これら2つに関しては、準備と強化したい能力の双方の評価が、それぞれの項目で一致する傾向にある。

5) 今後のフレンドシップ事業の充実に関して

受講学生に対して、「今回のプログラム以外に取り入れてみたい活動」と「宿泊を伴う野外教育活動以外の企画アイデア」について自由記述を求めたところ以下のような回答が得られた。

表-9. これまでの準備や努力と今後強化したい能力との関係

項目	相関係数	検定結果
1. 組織・管理能力	-.12	
2. 指導能力	.65	**
3. 問題解決能力	.33	
4. 集団運営能力	.09	
5. 環境理解	-.27	
6. 野外活動技術	.74	**
7. 安全技術	.08	
8. 児童の理解	.21	

\*\* : p<.01

今回のプログラム以外に取り入れてみたい活動として、カヌー、いかだづくり、魚釣り、オリエンテーリング、野外での宿泊、陶芸、凧・気球などの物づくり、大黒島生活、雨天時プログラムなどがあり、その他、保健調査票づくり、ミーティングを毎日、ゆとりの時間の確保が挙げられていた。

宿泊を伴う野外教育活動以外の企画アイデアとしては、1日の日程でゲームや球技大会を企画し、色々な小学校から参加者を募集する。体育館で、伝承遊びの遊び道具づくりを参加者で行い、自分たちで遊ぶ。パソコンを使ったインターネット対話。小中学校の体験的活動の手伝いをする。公園でジンギスカンパーティー企画。一日登山。サイクリング。が挙げられた。

### 要約

1998年7月に2泊3日をメインとする、フレンドシップ事業について、学生と教員による事業評価では、活動地域の自然環境やその活用に関する項目の評価が高く、スタッフの休養と自由時間の確保の評価が低かった。管理・運営とプログラムの2領域の評価では、学生と教員に違いが認められた。効果があったとされた個別プログ

ラムは、地引き網、野外炊飯、ネイチャーゲームであった。班指導者の自己評価として準備と努力を行ってきており、さらに、今後強化したいとする能力は、共に、「児童の理解」であった。

### 参考・引用文献

- 1) American Camping Association (1980) Camp Standards with Interpretations for the Accreditation of Organized Camps, American Camping Association.
- 2) 井村仁 他 (1991) フロンティア・アドベンチャー事業に関する評価研究, 筑波大学体育科学系紀要 14, 99-112
- 3) 恵土孝吉 他 (1998) 「野外教育論」と「フレンドシップ事業」との合併授業の試み, 日本や害教育学会 第1回大会研究発表抄録集, 32-33
- 4) 八回道教育大学旭川校フレンドシップ事業企画運営委員会 (1998) 平成10年度フレンドシップ事業報告書
- 5) 田崎徳友 (1997) フレンドシップ事業「子ども理解の体験学」第一弾, 文部時報 no.1453, 33-35
- 6) 張本文昭 他 (1998) 琉球大学教育学部学生によるキャンプ運営・指導の試み. 野外教育研究 2(1), 39-45.